神凪町奇想譚

瀬河ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神凪町奇想譚

【Ｎコード】
Ｎ３１７４Ｚ

【作者名】
瀬河ナツ

【あらすじ】
親が死に、妹と町から逃げ出した少女。家出の中でさまざまの人に出会い、学び、成長していく物語。どちらかといえばシリアスが多くなりそうな物語が今始まる。
※この作品は恐らく多重クロスです。そういうが苦手な人はブラウザバックを押してください。でも、一回でも読んで下さるとうれしいです。

プロローグ（前書き）

ようやく完成しました。いろいろとツッコミ所はあると思いますがやさしい目で見守ってくださるとありがたいです。

プロローグ

――――ざぁぁぁぁぁ

鬱陶しい程に雨が私達に降り注ぐ。それはまるで泣かない私達の代わりに泣いているかのように、私は妹と共に両親が眠っている墓石の前で傘を差しながら突っ立っている。すると沈黙に耐えかねたのか妹が、

「……ねぇ、おねーちゃん。おとーさんとおかーさんはどこにいったの？」

と聞いてきた。まだ幼い妹の事だ、私達がここにいる理由が分からないのだろう。それを私は年相応で可愛らしいと思う気持ちと、理解する事が出来ない事に対する羨望だった。妹はこんなにも年相応の子供っぽさを持っているのに、私にはそれがない。まだ六歳と子供なのにだ。だからこそ、私は年相応の幼さを持つ妹が羨ましかった。

「お父さんとお母さんはね、遠いところに行ったの」
「とおい、ところ？」
「そう、私達には遠すぎて行けないところに行っちゃったの」

真実を少し濁して妹の質問に答える。我ながら美味い濁し方だと思う傍ら、こんな事が出来る私に自己嫌悪する。……私も、妹みたいに子供っぽかったらこんな思いはしなかったのに……

「……ねぇ■■、私もちょっと出かけてくるから、友達の家で待っ

ててくれる？」
「……おねーちゃんもどっかいっちゃうの？　おねーちゃんは帰ってくる？」
「……うん、いつか必ず帰ってくるから、それまで待っててね」
そう言って私は妹を連れて墓場の入り口で待っていてくれている両親の知人の所に行く。私も何回か遊びに行ったことがあって、この町で神職をしているらしく、両親の葬式の時に妹の面倒を見てくれと言ったら少し渋ったが承諾してくれたのだ。

「……本当に行くのかい？　前も言ったけどあんたも引き取ったって構わないんだよ？」

その方が友達も増えてあの子も喜ぶだろうし。そう、待っててくれた二人の女性の一人が言ってくれる。それは完全な善意の元に言ってくれた言葉なんだろう。確かにその言葉は嬉しかったし、受け入れるか少し悩んだ。でも、

「……いいんです。私一人ならなんとかなりますから」
「一人ならって、あんたまだ六歳「言っても無駄だよ」……どうしてだい？」
「この子もただ言っただけじゃないと思うからね。きっと何を言っても考えは変えないだろうね」

そう言ってもう片方の女性が片方の女性を止めてくれた。そして、二人して私の眼を覗いてくる。二人の眼には私の眼がどう映ってるのか分からないけど、二人の眼に反射した私の瞳は透き通っているけど、意思の篭ってないガラスのような空色の瞳が見えた。

「……なら仕方ないね。でも、何かあったらいつでもこっちに来ていいんだからね。神様は人に救いを与えるのが仕事なんだから」

「そうだよ。あんたはまだ若いんだから。何かあったらいつでもこっちにおいで。妹ちゃんは私達が全力で守るからね」
「……ありがとうございます。では、私はもう行きますね」

そう言って私は妹を預け、歩き始める。

――――そう、この日私は妹も、自分の住んでた町も捨てたのだ。ここにいたら両親の思い出に浸って前に進めそうもないから、妹と一緒にいたらいつか大変な事を起してしまいそうだったから、それが怖くて私はここから、神凪町から逃げ出したのだ。

「と言ったもの、その前に荷物とか整理しないと……」

とまぁ、シリアスにいこうと思ったんだけど、そうはいかず、私は今自分の家に戻って荷物を整理している。この町を出るにしたって、お金とか必要だしね。というか私の口調も性格もさっきと違う？　あぁ、これは一人の時の口調で誰かといる時はあの口調だよ。

まぁ、外用の仮面みたいなもんだよ。

「えーと、まずはお金でしょ、体術や剣術の技術書でしょ、後は……」

そこで、ふと思い出したのかのように私は立ち上がり、父の部屋に移動する。父からは入っちゃダメと言われていたが、その父ももういない。その事を改めて実感し、少し胸が痛む。でも、それを振り切って私は父の部屋をあさり始める。

「……多分ここら辺にあると思うんだけど……あ、あった」

本棚の後ろを探しているところ、手に何か当たるものがあった。それを引っ張り出してみると、なんか棒状的な物が入った袋があった。さらに中の物を取り出してみると、中には二本の刀が入っていた。

「えっと、これだよねお父さんの刀って……？　よっと、って重っ……流石に持つのが限界かな……？　振るうなんてとてもじゃないけど出来ないや」

試しに手に取ってみるとずしっとかなりの重量感があって持っているのが精一杯だった。でも、背負う事なら出来るかも……そう思って試しに袋に入れて袋の肩紐に両肩を通して背負ってみると、重いけど背負えない重さではなかった為、背負って持っていくことにする。父の部屋にもう用はない為、父の部屋を出ようとして最後に父の部屋に振り向いて、

「……お父さん、お父さんの刀を借ります。返す事はないと思いますけど、大切に使わせてもらいます」

そう言って私は父の部屋から出た。といってもまだやる事はいっぱいあるからまだ家は出ないけど。さてと、次にやらないといけないのは……拠点探しかな？　この町を出るなら誰かの家に行かないといけないし……というか、とりあず剣術の練習が出来るところがいいかな？　とりあえず両親の仕事のコネを伝ってみよう。

――――しばらくお待ち下さい――――

「はぁはぁはぁ、やっと見つかった……お父さん達コネ多すぎでしょ……」

うぅ……さっきは大人なびた性格が恨めしいといったけど、この子供な身体も恨めしい。作業するのも一苦労だよ……せめてどっちかに傾いてくれればよかったのに……いや、六歳なのに大人の体とか嫌だけどね。それはともかく、私が行くべき場所はなんとなく決まった。後はそこに行って稽古つけて貰えるか頼むだけだ。

「さて、お金よし、本よし、刀よし、行き先の住所よし、後は……一応確認しておくかな？」

そう言って私は台所に赴き、包丁を取り出し、意識を集中させる。

――――それは赤く燃え滾る灼熱の炎。闇夜を照らす明るい光。

「創造（Ｂｒｉａｈ）――――」

そう呟くと同時に包丁から炎が放出され始める。……はぁ、成功して欲しくなかったけど成功しちゃったか……。そう、これは私が

生まれた時から持っていた能力、『自身が想像した性質を創造し、物質に付加する能力』だ。正直私はこの能力(ちから)が好きじゃないてか嫌いだ。自分の異常性を改めて認識しているみたいだから。自分が普通じゃないと思わせる決定的なものだから。……本当にこの性格も能力もなかったら良かったのに……そうすれば、今も妹と――――

「――――って今更何を考えているんだ私は。やめやめ、準備を終わったしさっさと出発しよう。ここにいると負のスパイラルに陥りそうだからね」

とにかくさっさと家から出よう。そう思って荷物を纏めて家を出ようとしたとき、

――――ざぁぁぁぁぁぁ

……うん、そういえば雨降ってたね。うん、すっかり忘れてたよ……。というかスッゴい土砂降りなんだけど……これは今日出発するのは無理かな……？　うん、明日必ず出発しよう、そうしよう。

「はぁ……とりあえず夕飯の仕度しないと……」

完全に出鼻を挫かれて意気消沈気味になってしまった私は速攻で夕食を取って、明日に備えて早く就寝しました。べ、別に悲しくなんかないんだからね！

プロローグ（後書き）

作者の言い訳
主人公の年と口調について＞一番は口調を子供っぽくするのがものすごく抵抗があった為、少し丁寧で大人びた感じにした。素は年相応の性格。
とまぁ、今回はこんな感じです。あと、今回は主人公が結構強い作品ではなく、かなり弱い部類に入ると思います。
次回からは少し進展させていきます。それでは、また次回お楽しみに下さい。

第一話（前書き）

意外と早く書きあがったのでこっちも更新です。では最新話どうぞ

第一話

――――夢を見た。父親が死ぬときの夢を、

『――、大――か？　よ――――無――――……』

――――ねぇ、お父さん、何を言ってるの？　よく聞こえないよ。

『――――は残っ――か……。――――うまく――ていると――いんだ――――』

――――ねぇ、お父さん。どうしてそんなに死にそうな顔してるの？　なんで、そんなに血だらけなの？

『――――こにいて――――守って――くれ。大――だ。俺――――強――らな……』

――――そんな傷だらけじゃ説得力ないよ……。でも、分かった。――は私が守るから、お父さんは安心して行って来て。

『そう――、もう――――の誕――――ろ？　実はも――ってある――――。――にある――――、――でて――ぞ。なぁ――、プレ――――は――買え――――』

――――え？　どこに置いてあるの？　聞き取れなかったよ。

『じゃあ、――てくる――』

――――うん、行ってらっしゃい、お父さん。待ってるから、必ず帰って来てね。死んじゃダメだよ。

――――そして、

『ゴホッゴホッ！　はぁ、――で―後か……』

――――お父さん、

『……――、すま――な……俺はも――――たいだ……』

――――お父さん、

『くそっ、――――まれて、――――から小学校に――――ていう――な時に――――になる――て……』

――――お父さんっ、

『でも、――――ないか、―も――も沢山――――したからな……――応報って奴か――』

――――お父さんっ！

『あぁ、――つの真似じゃ――――ど、今日は――――にも――綺麗だ……』

「うわぁぁぁぁぁぁ！　お父さんっ！　……あれ？　もしかして夢

……？」

……だとしたらなんて嫌な夢を見たんだろう。父の、お父さんの死ぬ間際の夢を見るなんて……。悪夢にも程がある。

「……よし、気を取り直して、朝食食べて、今日の弁当を作って出発しよう」

そうやって自分に言い聞かせて立ち直り、私は朝食の支度をし始める。……そうだ、立ち止まってなんていられないんだ、自分の為にも、妹の為にも。

「さて、天気もいいですし今度こそ出発ですね」

と、一気に時間を飛ばして朝食を食べ終え、一応非常食とおにぎりを鞄に入れておきます。ある事にしたことはないですし。さて、では出発する前に……、

「……お父さん、お母さん、行ってきます。いつか必ず帰ってきますから、それまで待っていてください」

……では、行きますか。そう思い、家に背を向けて歩き始めようとしたその時、

「あー、いたいた。よかった、まだ出発してなかったみたいだね」

昨日の女性二人が私を訪ねて来たみたいです。はぁ、なんで私が出発しようとするとこうやって出鼻をくじかれるんでしょう？

「……どうしました？　私は今から出発する予定なんですけど」

「……やっぱりその口調は変わらないんだねぇ……というか昨日は出発しなかったみたいだね」

「まぁ、あんな土砂降りの中出発する必要はないですし、それに傘を持ってくような荷物の余裕は有りませんし」

「だったその刀を置いていけばよかったんじゃないの？　それ、あいつの刀でしょ？」

それは無理です。命狙われた時どう対処すればいいんですか？……はいそこ、どうせ重すぎて刀振れないのにどうすんだ？　とか言わないでください。遠心力を味方にすればきっと……間違いなく肩が外れますね。はい、無理です。でも刀は持っていきます。

「……それで、そんな事は置いといて、一体どうしたんですか？出発するのを止めに来んなら全力で抵抗しますけど」

そう言いながら私は二人を睨みつけます。本当にそうなら全力で走れるように姿勢を少し低くしておく。

「まぁ、そう身構えなさんな。私達は別にあんたを止めに来たわけじゃないよ」

「……そうなんですか？」

「うん、私達が今日来たのはこれを渡すためさ」

そう言って二人から手渡された物は幾つかの紐の輪が重なっていて、ところどころに翡翠色の石のついたブレスレットでした。……なんでしょう、このブレスレットからとてつもない力を感じるのですが……、

「私達のお手製だからね、加護も半端ないと思うよ」

「……そんな物貰っていいんですか？　他にも渡すべき人は居るでしょう？」

「まぁ、それはそうなんだけどね。これから旅立つあんたへの餞別さ。それなら身につけておくだけだし、荷物もならないだろう？」

……私も妹も、この人達には本当にお世話になりますね。

「ありがとうございます。これ、大切にします。それでは、もう行きますね。いつか必ず、帰ってきますから……！」

「あぁ、あんたの妹と待ってるから、何時でもおいで、私達は大歓迎だから。だから、そんなに泣くんじゃ無いよ」

「うん、また遊ぼうね……莉紗」

「……はい！」

こうして、私はここから、神凪町から旅立った。

「さて……張り切って行こうと思ったんですけど……ここ、どこでしょうか？」

私は今、目的地へ向かうための山道を歩いているのですが……完全に道に迷いました。でもまだお昼ですし、少し昼食がてら休憩を取りましょう。そう思ってどこか座れる場所を探していると、

――――人が倒れていました。

……うん、見なかった事にしましょう。流石に行き倒れをどうにかするような余裕はありませんし、

「さ、さぁて……どこか休憩出来る場所を探しｔ「たぁ……すぅ……けぇ……てぇ……！」きゃぁぁぁぁぁ！」

こ、怖いです！　なんかゾンビみたいな途切れ途切れな声を出してきて怖すぎます！

「み、みずぅ……！」
「み、水ですか……？」
「……（こくこく）」

既に喋る事も億劫なのか頷くだけになった女性にペットボトルに入ったお茶を渡す。すると女性はひったくるかのように奪い取り、一気に飲み始める。

「――――ぷはぁっ！　あー、生き返るぅ！　ありがとう！　助かったわ！」
「は、はぁ、それは何よりですが……どうしてこんなところに居る

んですか……？」
「えーっとねぇ……ふらふら目的地に向かって歩いていたら迷ってた」

……この人、かなりの方向音痴です。というかいつの間にかって……女性の人は顔とかに土が付いていますが、キレイな顔付きをしていて、肩に私が持っているような袋ってまさか……この人、

「あの……もしかしてその袋の中には……」
「ん？　ああ、そうだよ。多分君のご察しの通り、中には私の愛刀が入ってるよ」

……間違いなく父とかと同業者ですよこの人。

「それよりも、私はあなたが何者かが気になるかな？　あなたが持ってる袋の中に入っているのも刀でしょ？」
「……あなたは一体？」
「私は桜御影（さくらみかげ）、今は自称だけど、いずれは世界最強の女剣士になる予定の女よ」

……桜御影。どっかで聞いたことがあるような気がしますが……何処ででしたっけ？　確か父が言ってた気がするんですが……うーん、思い出せません。

「で、あなたは一体なんなの？　場合によっては斬らなきゃいけないんだけど」
「……私は川里莉紗。ちょっと諸事情により家出してあるところに向かっている途中のただの六歳児です」
「はいダウト。あんたみたいな六歳児いるわけがないでしょう！」
「そんなの自分で自覚してますよ！　でも実際に六歳なんですから

しょうがないじゃないですか！」
「事実だとしても流石に大人び過ぎでしょー！？　私より大人びているわよー！　というか諸事情とかそんな単語どこで覚えてるのよー！？」
「そんなの私が知るかぁー！　てか私の方が大人びてるっておかしいでしょー！？　ついでに私の知識は大抵読書によるものだー！」

〜〜〜〜カオスが続いてますのでしばらくお待ち下さい〜〜〜〜

「はぁ、はぁ、はぁ！　ろ、六歳児に言葉で負けるなんて……！」
「なめ、るな……伊達に一日二、三冊ペースで、本を読んでいないよ……！」

ふ、不毛な戦いだった……！　というかどうして喧嘩してたんだろう私？　昼食取ろうとしてた筈なのになぁ……、

「そんな事より、さっきと口調が変わってるわね。そっちが素なのかな？」
「……あ。……な、なんの事ですか？　言ってる事が理解できないんですけど」
「今更繕っても遅いわ。素でいいよ」

くぅ、あの恐怖の時点で軽く仮面が剥がれそうになっていたからとはいえ、こうも簡単に剥がされるなんて……不覚。

「さて、それでどうして家出なんてしてるのかな？　私も家出している身だけど、中学卒業してからよ。流石に六歳の時から家出なんてしないわよ」
「……はぁ、そっちがいいって言ったから素で話すけどね、私の両親、こないだ殺されたんだ」

「……あぁ成る程、川里ってどこかで聞いた気がすると思ったらあなた、あの川里の一人娘なのね。……成る程、これが魔女と御神の娘かぁ……」

あれ？　一人娘って妹もいるから二人の筈なんだけどな……。それに最後の方はぼそぼそとしてて聞き取れなかったし……そしてあの川里って何さ？

「それで、両親が殺された敵討ちの為に家出したの？　やめた方がいいと思うよ、今のあんたじゃ人一人殺せない。ただ無駄死にするだけよ」

「んな実益のない事はしないよ。今守れないものよりも今守れるものを守りたいから、その力が欲しいから家出したの」

「ほぅ、つまりあんたは、川里莉紗には守りたいものがあると。例えば？」

「お父さんとお母さんが残してくれた技術、後は二人が命がけで守ってくれた私自身」

そして、今は預かってもらってる私の妹、私が守りたいのはそれだけだ。

「……ふぅん、でもその為には実力が足りない。だからその力を手に入れるためにあなたは家出したのね」

「うん、そうだよ」

「……あっはははははは！　馬鹿だ！　馬鹿がいる！」

暫くの沈黙の後、御影さんはそう言って笑い始める。な、何がおかしかったの……？

「どうせアテはあるんだろうからそれを前提に一つ、仮にそのアテ

の所に行ったって剣を教えてくれるとは限らない」
「……あ」
「二つの、さらに仮にだけど、教えてもらうとしても莉紗に剣術の才能がないかもしれない。まぁ、あり得ないと思うけど」

そう言いながら、御影さんは私のおにぎりをって、

「なに勝手に私のおにぎり食っとんじゃー！」
「いや、そこにあったから」
「確かに置いてたよ？　でもそれ私のだから、御影さんの分はないから！」
「ならば、殺してでも奪い取る」

こうして、私と御影さんのおにぎりを巡る第二ラウンドが始まった。というかこの人は本当に年上なのだろうか？　普通に疑問なんだけど。

第一話（後書き）

作者の言い訳。
一、冒頭のシーンについて＞ちょっとやってみたかったのと、両親の死に際を少し書きたかった。
二、莉紗の貰ったものについて＞現段階では不明。ぶっちゃけそこまですごいものではないと思います。
と今回はこれくらいです。次回も書きあがったら更新したいと思います。……いつかは分かりませんが。それではまた次回！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3174z/

神凪町奇想譚

2011年12月18日00時52分発行